

聖書:テサロニケ人への手紙第二 3章6~18節

説教:平和を与えてくださる主

はじめに

今年もあとわずかになりました。一年を振り返って、いろいろなことがあったなと改めて思い返していらっしゃるのではないのでしょうか。いつも思うことですが、平穩無事で終わることはほとんどなくて、必ず「あのときは大変だった」ということがいくつか思い出されます。いったいどんなことが大変だったか。いろいろある中でも、おそらく最も切実なものの一つが人間関係のことでしょう。職場や学校、親戚づきあい、あるいは親子関係でも起きてしまう。そして残念なことに教会の中においても起きてしまうことがある。今朝開いているところもまさにそのようなことです。

テサロニケ教会はパウロが開拓した教会だったのですが、パウロが去ってから教会の中で大きな問題が起きている。そのことを知らされたパウロは、本当は自分が直接行って指導したかったのですが、事情があってそれができなかったために、わざわざ二通の手紙を教会に書いて指導します。いったいどんな問題が起きたのか。それに対してパウロはどのように指導したのか。そしてこのことは私たちにどのようなことを教えているのか。ともに見てまいります。

## 1 問題

### 1) 仕事をしない人たち

まずテサロニケ教会で起きた問題とは何であったのか。そのことについて3章11節にこう書かれています。「あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいると聞いています。」

「怠惰な歩みをしている人たち」とあるのを読むと、「怠けている人たち」とすぐに連想するでしょう。「仕事もせずにお節介ばかり焼いている」とあるのでなおさらです。しかしパウロの時代に限らず、あるいはテサロニケ教会に限らず、いつの時代、どこの町にもこのような人たちはある一定の人数でいたでしょう。なにも特別に珍しい存在ではなかったはずです。それなのにどうしてこんなに大げさに問題するのか。

ここで誤解のないように付け加えておきますが、これは「引きこもり」とか「不登校」と呼ばれる人たちとはまったく違います。実を言えば、私がかつて大学生時代ですが、不登校と呼ばれる時

期を四年間ほど過ごしたことがあります。周囲から見れば「引きこもり」と見えたはずですが、でも私の時代にはそのようなことばはなく、適切なアドバイスはなかった。どうしてこうなったのかも自分で説明ができなくて、本当に悩んだ経験があります。働きたくないとか、怠けたいというのでは決していない。一番つらいのは本人です。もしも身近にそのような方がいても、今日の聖書の箇所を開いて責めるようなことは決してしないでくださいことをまず知っていただきたい。これから説明しますが、ここで取り扱っているのはまったく違う人たちのことです。

### 2) 口先ばかり

ではどんな人たちなのか。ヒントは11節の「おせっかいばかり焼いている人たち」ということばです。しかし、ここからだけでははっきりしない。そこで12節を見ます。「そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」

この中の「落ち着いて」と書いてあるところは、「黙って」とか「口を閉じて」とも訳せることばです。このことからパウロが問題にしているのはどんな人たちのことかが少しわかってきます。仕事をせずに、しゃべってばかりいる人たち。このように言いますと、皆さんの中に「これは私のことかしら」とドッキリした方もいるかもしれない。安心していただきたい。いわゆる「おしゃべり好き」のことではない。ここで問題にしているのは「まったく仕事をせずに、おしゃべりしている口先だけの人たち」のことです。

### 3) ことばと行いが一致していない

でも先ほど言ったように、このような人たちはどんなところにもある程度いたでしょうから、ことさらにパウロが口を酸っぱくして指導するのはなんとなく腑に落ちません。そこでもう一つ、6節にある「私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟」ということばがヒントになります。私たちから受け継いだ教えとは、もちろん、主イエス・キリストの十字架の死による罪からの救いと、死からよみがえられた方の永遠のいのちの約束です。テサロニケ教会はパウロからこの福音を聞いて信じ、迫害という試練の中にあっても堅く信仰を守り通しました。しかし迫害が激しくなっていくと

き、主の再臨について極端な考え方をする人たちが出て来る。「パウロは主の再臨のことを教えてくれた。迫害がこれだけ激しくなっているのだから、主の再臨はもう間もなくに違いない。であれば、私たちは働くのを止めてただひたすら祈って主を待ち望もうではないか。」こんなふうに叫ぶ人たちが現れた。パウロはこれを聞いて手紙を書いた。なぜならパウロはこんなことを一言も教えなかった。いや、パウロが教えた福音に真っ向から逆らうような教えであったからです。でも、いったいどこが間違っていたのか。確かに働くのをやめるのは極端だけれども、主の再臨を待ち望むことはすばらしいことではないのか。

いつの時代にも、聖書の解釈を巡っていろいろ極端な考え方や主張が繰り返されてきました。今もそうです。そのとき私たちはどこを見て、これは正しいとし、どこを見てこれは間違いと判断するか。見分けることは難しいように感じますが、実はある意味で非常にシンプルとも言える。どうやって正しいことと間違っていることを見分けるのか。折角の忙しい年末に教会に来られたのですから、大切なことを覚えていただきたい。

今日は結論を先に述べます。『語っていることと、行いが一致しているかどうか。』これが見分けるポイントです。パウロが問題にした人たちはどうだったのか。口先では非常にすばらしいことを語っていたのかもしれませんが、しかし、実際はどうか。結局、ほかの人の世話になって、今日はあそここの人のところ、明日は別の人のところ、そうやって家々を転々として巡り歩いてパンを食べていた。皆が裕福であったわけではない。ギリギリの中で生活していた人たちもいたでしょう。そういう人の家にも遠慮もせずに入出入りして食事をする。自分は何一つ苦勞をしないで、ほかの人に迷惑をかけてパンを食べさせてもらう。結局、そういうことをしていた。普段はあたかも信仰深いことを語っていながら、やっていることはこうだった。語っていることと、行いがまったく食い違っていた。そこを問題にしているのです。イエスもこう言われました。ルカの福音書6章43節。「良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありません。」これが良い木なのか悪い木なのか、外見からはすぐにはわからない。でもその木からできる実を見れば、行いを見れば、それが良いか悪いかが判断できる。

## 2 問題が起きたら

### 1) 注意を払う

ではどうするか。14, 15節。「もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。その人が恥じ入るようになるためです。しかし、敵とは見なさないで、兄弟として論しなさい。」

一つ目は注意を払う。これはどういうことか。何か問題が起きたとき、牧会的な配慮として、ごく限られた人たちの中で問題を共有するけれど、教会全体には知らせないということがときどきあります。しかし、他の兄弟にも大きな影響を与えて信仰の根幹に関わるようなことが予想される場合には、問題を公にすることがあります。これが「注意を払う」ということになります。

### 2) 交際しないようにしなさい

続く「交際しないようにしなさい」は非常に厳しく聞こえます。でもこの後に兄弟として論しなさいとありますので、これはまったく付き合いをしないと言う意味ではありません。分離する、別けていく、が本来の意味です。例えば、普段の交わりは普通にするけれど、信仰に関わる時には問題を起こした兄弟は別にする。

具体的に言いますと、問題がある兄弟についてはある期間を定めて聖餐にあずかることができないう措置を施すことがあります。この教会では過去にそのような事例が一件ありました。処罰することが目的ではありません。「その人が恥じ入るようになるためです。」あくまでも本人が自分の誤りに気がついて元の正しい道に戻っていただくことが目的です。

しかし、もうおわかりだとは思いますが、これは口で言うのは簡単ですが、実際は大変難しい。というのは、どうしてもそこに人間的な感情が入り込んでしまい、落ち着いて冷静に対応するのが難しい。いろいろな意見が出て来て混乱することがあります。

### 3 平和を与えてくださる主

パウロはもちろんそのことをよく知っています。ですからこのように言います。16節。「どうか、平和の主ご自身が、どんな時にも、どんな場合にも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてとともにいてくださいますように。」

どんな時にも、どんな場合にもとあります。何か問題を抱えたとき教会が平和を保つことは非常に難しい。ときには、この世の人間的な考えで先走っ

てしまうことがあります。でもこのようなときにこそ、私たちはどこに向いていくべきなのか、教会が何を見てきたのか、その真価が問われてくる。教会に平和を与えるのは人間ではない。平和の主ご自身が平和を与えてくださる。そのことを信じられるのかどうか。教会が試練に遭ったときにこそ、私たちの信仰がどのようなものであったのかがはっきりとわかってきます。

私たちはここから何を教えていただくのでしょうか。問題が起きたらこうしなさい、ということもそうですが、パウロが何を問題にしたのか。その根本の所を忘れてはならない。言っている事と行っていること、この二つがいつも同じなのか。そのことです。でも、いったいどうしたら一致させられるのか。難しいことではない。ただ一つです。私たちは罪の性質を持っているので、一致させることができない。「主よ。私は罪深い人間です。」この罪の告白こそが、神の前で私たちがしていくことになる。そこに神からいただく本当の平和がある。そのように語っています。

この一年も、教会ではいろいろなことがありました。大きな嵐のような試練はなかったかもしれませんが、小さくはない波が押し寄せるようなことはいくつかあったように思います。しかし今日まで歩みを続けて来られたのはひとえに平和の主である方があわれんでくださって平和を与えてくださっていた。その恵みの中でこの一年を過ごすことができたことを感謝します。新しい一年もこのようにしてくださった主が引き続き皆様の上に恵みを施してくださるようにと祈ります。